

- 9) 近藤恵一：同誌 52, 13~36 (1967-b)
- 10) 服部茂昌：本誌第 8号 54~60 (1966)
- 11) 佐藤栄：本誌第 5号 80~102 (1964)
- 12) 佐藤栄：漁業資源研究会議報 第 2号, 11~20 (1965-a).
- 13) 佐藤栄：ミチューリン生物学研究 1(1), 27~50 (1965-b).
- 14) 東海区水産研究所：東海区長期漁況予報 №1, 4, 7, 11, 15 (1964~1968).

5 討 論

1) について：漁業者から“年によつて好漁場は浅海（水深 5 m 前後）にできたり、深いところ（同 20—30 m）にできたりするか、このような時の海流はどうなっているか、また、これは潮の具合か。さらに年によつては海底ばかりにいるときもあり、また別の時に浮網ばかりでとれる年もある”という質問があつた。小長谷氏から“駿河湾では遠州灘よりも魚群が一般的に深い”と回答された。

2) について：五十嵐氏（静岡水試）から“1962年以前と1963年以降の海流のパターンに相違がみられる”と意見が述べられ、ついで降水量と漁況について討論が行なわれた。とくに漁業者から“渥美・伊勢湾で貝がよくわくときにシラスも多い。また雨量の多いときに魚の種類も多い”と述べられた。

3) について：“漁業者はタイワンアキノコを区別しているか”という三谷氏（東海水研）の質問に対して、小長谷氏から“色の黒いもので、体長が短い”として区別しているし、天野氏（愛知シラス連合会）から“41年10—11月に色の黒いのが多かつた”と報告された。

4) について：岸田氏（東海大学）から “i) 産卵群は潮岬を越えて南に行かないか。ii) 群が切れるのは海洋条件によるのか。”との質問があり。近藤氏から “i) 産卵予備群の時期（12月—翌年2月）には常磐—房総海域で多獲され、5—6月に産卵群の一部として房総海域へ現われる群を漁業者は「帰りイワシ」と呼んでおり、産卵場も房総—熊野灘にある。これは遠州灘—紀伊半島にいたる流域の地理的条件にもよるが、明確な要因はつかんでいない。ii) 魚群が3—4日から1週間以内で量的に変動していることは、さらにむねの段階で検討したいが、海況の短期変動も同じような周期性があるといわれる（服部談）ので、今後研究を具体的に発展させていくなかで明らかにしていきたいと思う”と返答があつた。

引続いて総合討論に入り、五十嵐氏から“黒潮流軸のパターンと漁況との関連、静岡県で斃死魚のみられた年は昭和22・31・38年で、これらの年には黒潮流軸が野島埼沖で離岸している冷水がながつている年に起る”と説明があつた。続いて宇田氏から黒潮の型の持続性と変化

について、とくに航空機観測の必要性が述べられた。さらに豊浜の漁業者から“1年を通じて午前中に干潮時がある日にシラス好漁、午後干潮時があるときには愛知県側では不漁で、舞阪に近い海域でやゝ漁がある程度”という話題があり、五十嵐氏から“潮がガラツとかわつて明るくなつたり、暗くなつたりすると好・不漁が起るがシラスではどうか”という漁業者への質問があり、これに答えて“台風後の濁つた時にシラスは好漁、流動が強くなつた時に好漁で、その後2-3日たつと全くとわなくなる。”さらに天野氏から“台風も大型(風速50-60m)だとその通過後1か月くらい獲れないが、中型(同20m程度)だと2-3日で獲れはじめる。また、シラスが沖合からくる場合には漁があり、東から来るときには漁がない”と回答があつた。五十嵐氏の“12月に出現するカエリはどこに行つてしまふか”との質問に対し、天野氏から“41年12月に伊勢湾奥部にいたのはそのまま年を越して42年1月中旬まで獲れた。これは水温に直接関係ないのではないか”との回答があつた。